



忘却の外側

忘れられても、消えない層がある。

記憶は崩れる。
名前も、関係も、順番も、やがて曖昧になる。

それでもなお、何かが残るときがある。
忘却の外側に位置する、別の層について。

それは奇跡の話ではない。
感動の演出でもない。

例外を語りたいわけでもない。

忘れていることは、事実である。
何度会っても、誰かわからない。

それでも、その日だけ、
名前が呼ばれた。

それを「戻った」と呼ぶのは、少し違う。

言葉は崩れる。
顔も、順序も、保持できなくなる。

それでも、残るものがある。

見送る人は、
最後まで見送る。

応援する人は、
応援するままにいる。

急いで会いに行った呼吸と、
追いかけてきた足取りが、
どこかで重なったのかもしれない。

理由は説明できない。
だが、残るものは、説明の外側にある。

忘却は進んでいた。
それは否定できない。

それでも、残存はあった。

消えることと、残ることは、
同時に成立する。

どちらかが勝つわけではない。



忘れてしまっても、
消えてはいなかった。

Edition — 存在の芯
別景：忘却の外側

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026